

2107年 日本の水文化の夢をかなえる10のポイント

【沖】

これからしばらくの間、先程までお話頂いた先生方からさらにご意見を伺ったり、討論をしたりしていきたいと思います。また会場の皆様より質問を頂いておりますので、先生方にはそれらにもお返事頂こうと思います。そして皆様がお帰りになる際には、普段と違う水の文化、あるいは100年後の社会について、新しいお考えをお持ち帰りいただけるといいな、と期待しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

それではまず、本日ご登壇頂きました皆様に、他の方のご発表を聞いたうえで、言い足りなかった、あるいは「もう少しここだけは誤解を招かないように言っておきたい」ということを、大変恐縮ですが、登壇順に江守さんの方からお願いできますでしょうか。

【江守】

僕からは、まず追加したいことがあります。温暖化の様々な影響についてお話して、その中に水資源や水害の問題が含まれることをお伝えできればと思いました。そこで最近特に、「温暖化を身近に考えて、ちゃんとその行動を促さなくちゃいけないので、日本がどういう影響を受けるのか具体的に教えて欲しい」というリクエストを受けるようになりました。確かにその通りだと思いますが、考えてみると温暖化して暑くなっても、日本にはお金と技術がありますから、エアコンをつければ大丈夫かもしれない。それから治水の技術も発達しているので、多少大雨が来ても大丈夫じゃないか。海面が上がっても堤防を高くすればいいのではないか。お米などの食べ物が取れなくなっても、海外から輸入して来ればいいのではないか。そう考えると、温暖化しても、お金で解決できるので、日本は大したことはないかもしれないですね。

これらの考え方は、部分的には必要な考え方だと思います。お金を使いながら、温暖化しつつある世界を生きていかななくてはいけないと思います。しかし同時に、お金が無い国が最初に温暖化で深刻な被害を受ける可能性があるということも考えなくてはならない。例えば海面上昇にしても、水害にしても、途上国の、特に熱帯地域にある貧しい国から温暖化による深刻な被害が出るというようなことが言われています。

その時に日本では何も影響はないかといいますと、最近言われていますのが、僕は社会学者ではないので、どれくらいリアリティがある話かは知りませんが、例えば難民が出るという話。それから村上先生のお話にも出ましたけれども、紛争ですね。「水を巡る紛争」「食料をめぐる紛争」「エネルギーをめぐる紛争」などが、環境が悪化するにつれて激化する。そうすると全体的に国際社会が不安定になって、日本も生きづらくなる。そこまで考えるのが、温暖化の日本への影響ではないかという気がいたします。

「温暖化」「水害などの増加」「水資源の不足」などがおきると、紛争が激化する可能性があるのか。これはぜひ他のパネリストの皆さんにもご意見を伺ってみたいと思います。

さらに温暖化の話を今日しましたけれども、人口の話について僕は全然触れませんでした。人口が減って行くことは、我々は温暖化だけ心配しているわけじゃないんですけれども、もしそういう立場でいるとすれば、嬉しいことでもあります。例えば「日本国内で排出する温室効果ガスを減らしたい」ということだけを考えると、人口が減り、一人当たりの排出量が変わらなければトータルでは減って行きますので、ありがたい。世界の人口もはや減って欲しい。もちろん人口が減る時には、国力が低下したり、高齢化に耐えなくてはならないなど色々な問題があるので、そんなに話は単純じゃないと思いますが。

また鬼頭先生から「環境容量があって、人口は増えなくなる時があるのではないか」というお話がありました。最近、日本で人口が減少していて、その理由を見るとやはり出生率が減っています。それはどういった環境容量のリミットに対応するのかと思いつつ、先生のお話を伺っていました。僕の想像では、そのリミットは色々な意味での社会的なストレスではないかという気がします。ストレスが、大きな環境容量になっていて、そのせいで人口は増えない。仮にそうしますと、途上国は早く経済発展して、人口増加が収まってほしいのですが、それは途上国の人も、早くストレス社会に移行してほしいと願っているのだろうか、と思いつつ聞いておりました。

【沖】

ありがとうございます。江守さんのお話では、二酸化炭素を出さない文明を作るというのが最後のメッセージだったかと思いつつ、それ以外の視点からもいろいろとお話を伺えそうな方に、本日はパネルに登壇していただいております。

それでは次は鬼頭さん。「文明システムで人口は決まる」というお話をさせていただきましたが、江守さんからも問い掛けが出ておりますので、その辺も含めてお願いいたします。

【鬼頭】

実は、「なぜ先進国で出生率が下がったのか」について、はっきり言って、私はよくわかりません。経済学者は「機会費用である」とか「女性の社会進出」とか「教育費の問題」などと説明していますが、やはり江守さんが仰るように、私は基本的にはストレスだろうと思っています。ですから、社会学者や心理学者にもっと参加して頂いて、環境と生活様式との関係をぜひ解明してもらいたいと思っています。

その一番良い例が日本です。日本で少子化がいつ始まったのでしょうか。少子化という言葉は90年代に入って来てから生まれた言葉です。“少子社会”という言葉が最初に白書の中に出て来たのが、1992年の生活白書です。しかし少子化という現象が、つまり次の世代の人口を維持できないぐらいの出生率になったのは1974年です。何の年でしたでしょうか。オイル・ショックですよ。73年の11月にオイル・ショックが起きまして、74年に実質経済成長率がマイナスになりました。

それではヨーロッパはどうでしたかでしょうか。大体その前後なのです。だいたい70年代、それから80年代に落ち込んで行きました。その頃何があったのかというと、ローマクラブが「成長の限界」というレポートを出しました。それから日本ではその少し前から環境問題が出て来て、環境基本法が制定されています。経済成長と人口成長を可能にして豊かにしてきた基本は、石炭であり、石油であり、

今温暖化を齎している元凶なのです。そういうものにはっきり気付いて来たのが、ちょうどその頃だったのではないのでしょうか。

その年の人口白書は「日本の社会、日本の人口」というタイトルで出ましたけれども、サブタイトルに「静止人口を目指して」って出ています。「人口をもう減らすな」と政府は言っていたのです。私はその当時大学院生で、その年に開かれた日本人口会議で、「若者に期待する。子どもは2人まで」というものですから、私は正直に2人で子どもはやめました。そういう傾向は、直接間接に浸透していたのではないか。それをライフ・スタイルだと思えば、それに傾倒する性質は、日本人に基本的にあったと思っています。

もう1つ私が付け加えておきたいところが、Co2の削減をどんなに一生懸命頑張ったって、我々が目の黒いうちは、というか100年後にも気温が下がるということは、恐らくありえないでしょう。人口はもう少しスパンが短いのですが、来年から出生率が少子化の水準を脱して、急に1.32から2.07くらいにバンと上がったとしても、人口の減少が止まるのは、2050年過ぎくらいです。つまりものすごく時間がかかります。現実的に30年かかって下がって来たのをまた同じくらいの勢いで戻して行くと、30〜40年出生率が上がるのにかかります。厚生労働省で試算してもらいましたが、2100年になっても人口減少は止まりません。

環境変動はもっと大規模に、もっとゆっくり起きると思います。現実将来の、まだ見ぬ子孫のためにいい環境を残すために努力をしなければいけない。自分の世代では報われないかもしれないけれども、我々は将来のことを考えることが出来る訳ですから、それをやらなくてはならないと思います。しかし一方で「気候温暖化に適応する」という必要もあると思います。私は今、パイナップル2鉢とパパイヤとマンゴーとアボガドを育てていますが、本当によく育ちます。パパイヤは今蕾がついていますが、温室ではありません。だからそういう楽しみを見つけたらどうか。そんなのんびりしたこととも言っていただけませんが、“適応”というのも1つのやり方だと思います。

【沖】

ありがとうございます。それでは「開発前提の社会からの脱却」「日本のような国では距離というのがマイナスの価値と捉えられているけれど、環境容量を考えると、モンゴルにおいては、距離というのには非常に価値が認められる」というお話を頂いた小長谷さん、お願いします。

【小長谷】

まず、「お金で解決することも必要だ」というお話がありましたが、それは確かだと思います。科学とか技術とかを全面否定してはないので、私も「ぜひ研究者にお金を」と思っています。しかし環境問題を基本にお金で解決しようとしている最大の例を、例えば中国で見ることができます。私が調査に行っているシリン草原では、海から水を引いて来て、しかもそれを淡水化して、草原に戻すプロジェクトが動きつつあります。これがもし実現したら、海の水を淡水にするために大量の熱エネルギーが出ます。その環境への負荷は、物凄いものになる訳で、しかもそれを草原、さらに高原まで持って行く。その時の電気代というのは凄いですよね。そうしてコストをかけたフィールドを何に使うかについてはまだ語られていないけれども、おそらくトウモロコシ畑だろうと私は読んでいます。エタノール。

そうすると「環境を保全するんだ」「草原を復活するんだ」という名目ですることが、もっとひどい病気を作るということ、日頃フィールドから感じています。

あと1つは、ストレスの問題です。確かに社会のストレスは増えているということは認めます。けれども、その女性が産まなくなると出生率を下げている最大の理由は、今のところ世界的には高等教育と最も関係しています。ですから、発展途上国でも女性達が大学へ行くようになると、出生率は一気に下がるでしょうから、それを直接ストレスだと表現すると、私はフェミニストではないけれど、攻撃されることは間違いないでしょう。優秀な女性が社会に進出して来て、無能な男性がストレスを感じていると言われてもしかたないと思いますよ。

そもそもストレスの測り方というのはものすごく文化的なもので、例えば夫婦が離れ離れになってしまうと、そのことがアメリカではストレスとして換算されますけれども、日本だったら「ああよかった」と思われるのではないのでしょうか。「亭主元気で留守がいい」ですから。このようにストレスは非常に文化的なもので、これは今、現在の環境問題をもし地球全体への人間が受けているストレスとしてみなすとしたら、そのストレスにも非常に文化的なものがあるというかたちで読み替えたいと思います。

【沖】

さすが小長谷さん、ありがとうございます。

では、最後に「水には選択の余地はない」「その水は公共物であって、水へのアクセスは基本的な人権である」と仰った村上先生。「転ばぬ先の杖原理」という訳は、さすがだと思いました。私が参加した霞ヶ関の会議では、proactive という言葉が差し支えなく使われていたものもありましたので、官僚の方々がみんな嫌っているわけではないのかと思います。さて、今の御三人のご意見をお聞きになっていかがでしょうか。

【村上】

まず環境問題・温暖化問題が、ある国々にとっては先程の小長谷先生からあった中国の話ではありませんけれども、商売になっている。よく海面上昇の被害国として、東京都知事まで出掛けて行って「えらいこっちゃ」と言って帰って来た、ツバルという島がありますが、あれが温暖化による海面上昇の結果であるかという、それに否定的な意見の方が強い訳です。あそこは元々近代化で開発をして、地盤が沈下して、結果的に確かに大統領が言うように、水位が都市に上がって来ている訳ですけども、それは温暖化の結果としての海面の上昇から来るものではなくて、むしろ自分達の過剰開発から来る結果であると考えている研究者も随分いる訳です。現在のように環境問題が錦の御旗になった時には、そういうことはなかなか言い難い。

例えば、水とは関係ないと言ってしまえばそうなんですけれども、ダイオキシンであれだけ大騒ぎをしました。それで全自治体が高性能の焼却炉をたくさん備えて、そこでしか燃やすことが出来なくなりました。「家庭で焚き火も出来ない」「家庭で出たゴミも燃やせない」という事態を私どもは迎えています。これもダイオキシンの丹念な調査をした結果によれば、日本の国土の上に堆積しているダイオキシンの大部分は、実は過去に撒いた農薬の結果であって、焼却炉ないしは焼却から出て空中に放出されたものではない。だからダイオキシンの話は、焼却炉会社の陰謀ではないかという笑

話があるくらいなのですね。一番儲けたのは焼却炉会社ですから。

環境ホルモンも 70 何品目の物質名について調査をした結果、いわゆる生物に対して影響があるかもしれない、生殖力その他に影響があるかもしれない疑いの掛けられる品目が一品目だけあったという結果が環境省から出ている。しかしそういう報道は一切されないで、「大変だ、大変だ」とばかり言っています。「大変だ」ということの持つ警戒効果はあると思っていますから、それが全面的に悪いとは言えないかもしれませんが、環境問題という一つの錦の御旗の中で、歪められている問題もある。その辺も私どもはきちんと認識しながら、真っ当な道を極力探して行きたいというのが、ポイントです。

それから、科学や技術が全面的に 100% 効果を発揮できないところで何が可能性として有り得るのかという問題です。これはギアツという文化人類学者が“ローカル・ナレッジ”という言葉を使い始めて、私どももよくそれを使います。栃木県と茨城県を流れている小貝川が決壊しまして、あの時に多く流された家々がほぼ全て新住民と言われる人でした。それで地元の人達は、「元々あんなところに家を建ててなあ」と密かに言い合っていたという話です。その話を聞いて、国土庁では新しく宅地開発をする時には、ボーリングだとか地質調査だとか、その他科学技術を使って出来る限りアセスメントをするけれども、同時に、その土地の古者にまず意見を聞くように、というマニュアルを付け加えたのでそうであります。これは当時の当事者から、直接聞いた話だから、多分本当のことであろうと思うんです。今でも国土交通省の中に、そのマニュアルは生きているはずですが、どこまで活用されているかわかりません。

そういう科学技術の合理的な評価からは必ずしも出てこないような、しかしその土地その土地に長く積み重ねられてきた知恵のようなものも、また問題の解決の一つに登場させてよいのではないかという議論が、多分先程のモンゴルの話なんかとも加えて、ひとつの話題として申し上げておきたいと思います。

【沖】

ありがとうございます。それではそろそろ 2107 年、100 年後を考える論点に入って行きたいと思えます。水に関して申しますと、どうもトータル量は増えるけれども、洪水や渇水が増える見込みです。何故渇水が増えるかという、たとえ年間の総雨量が増えても、それが安定して使える水資源の増加に繋がるとは限らないからです。それに対して、人口について、日本はすでにピークを過ぎましたけれども、世界人口も恐らく今世紀の半ば頃にはピークを迎えて、ゆるやかに減って行くだろうと想定されています。すると水が必要な人口も減りますし、生産にあたって水が大量に必要な食料を必要とする人口も減って行きます。そうしますと、今後ますます人口が爆発的に増え続けて、一気に破綻するというようなことではなくて、どこかで危機的状況もピークを迎えることになるのではないのでしょうか。そう考えた場合、これからの 100 年間にどんなことが起こるのでしょうか。

パネリストの方々のお話で“危機”というお話がありました。やはり少子化も危機だし、地球温暖化も危機だ。それに対して「変化する状況を楽しむようでもいいんじゃないか」、あるいは「お金で解決するやり方、技術で解決するやり方もあるだろう」といったご意見がありました。村上先生のお話の中では、「マスメディアは危機ばかりを語って普段のことを語らない」というご発言もありました。そこで

「水危機というのは本当に起こるのか」「温暖化に関して何かビックリするようなことが起こりうるのか、あるいは本当は当たり前のことしか起こらないのか」、「危機ということを科学者・専門家が発言することの社会的責任・意図」、「マスメディアとの関係」などについてお聞きしたいと思います。

【江守】

例えば、村上先生が先ほど仰ったツバルの話も含めまして、日本のメディアあるいは科学者も加担して、煽っているという批判はよく聞くところであります。ツバルに関して私自身の認識としては、仰る通りだと思っております。私が例えばテレビに出演した際に、必ずしも危機感を持たせるようなものではない発言をしようとしても、テレビはなかなかそういう説明をすべて放送してくれません。今世の中に伝わっている温暖化に関する話は、すごく両極端なものが多いような気がしています。「温暖化はものすごく恐ろしくて、あと 10 年くらいで何とかしないと、人類はもう少しすると滅亡してしまう」といった話があり、もう一方では「温暖化は本当かわからないし、良いこともあるかもしれないんだから放って置いてもいいんだ」という話です。

僕を含めて実際に予測などの研究に携わっている研究者の多くは、真実はその間にあると思っています。その両極端のどちらかが起こる可能性がないとは言えません。もしかしたら物凄い時代が来る可能性がゼロとは言えない。もしかしたら温暖化がすごくいいことである可能性も、ゼロとは言えません。しかし大方の見方としては、温暖化は物凄く極端なことではないかもしれないけれども、大雨が降る確率はどんどん高くなっていくし、極端に暑い日は段々に増えていく。そういうことはジワジワと起こるだろう。既に目に見えていると思っている人も多い訳ですが、もう少しするともっと目に見えて来るし、それが本当に耐えられなくなるかどうかというのは我々の寿命では来ないかもしれないけれども、その先の世代ではきっと来るだろう。何も対策を講じなければ、来るだろうと思われているぐらいだと思います。僕はなるべくバランスのとれた、極端に偏らない話をしようと心がけております。極端に説明するとすごくわかりやすいと思うのですが、「いや、本当はそうじゃなくて、もっと地味な話ですがこうですよ。長い目で見れば怖いですよ」と、ちゃんと伝えていかなければいけないと思います。

また僕は予測が専門なので、「予測をすると、こうなって大変です」という話をして帰ろうとすると、「ちょっと待ってください、じゃあどうしたらいいんですか」と言われます。僕はその意味において、すごく怖い話をして帰る人だと思われていることが多いのですが、本意はそうではありません。「温暖化して悪いことがあります」という話をするのは、「その状況を回避することを、これから皆で考えなくちゃいけない」と言うために、悪い影響の話をしませるので、本当はそこまで含めて伝えたいという思いがあります。

【沖】

ということは、例えば江守さん達の将来展望のシミュレーション研究によると、温室効果ガスの排出削減を社会のみんなで頑張れば、「怖いことは起こらない」可能性もあるのでしょうか。

【江守】

今、地球の平均気温が 300~400 年前から 0.7℃くらい上がっていますが、それを例えば 2℃で止

めるとか、3℃で止めるという話を世界が真剣に考えているところです。2℃上昇で止めるのは、頑張っても大変だという気が段々して来ましたが、3℃くらいだったら達成できるんじゃないかと思っています。それをやるにしても、先ほど言ったように、排出量を今の半分とかそれ以下にしないといけないという話になります。そうすると適応して我慢できるくらいの温暖化で抑えることができるのではないかと。それは僕は予測ではなく希望だと思っているんですけども、そういうような話をしております。

【沖】

今言われた「適応」というのは、「暑いけれど団扇でいいや」という話だけではなくて、災害に対しても防御するという話ですか？

【江守】

そういうのも含めてですね。

【沖】

他に、何か危機、あるいは100年後ということに対してどなたかご意見はありますか？

【鬼頭】

人口の減少は、1人当たりのエネルギー消費は維持したり多少増やしても、全体で減らすからかなり環境減るだろうという、トータルの良い面もあると思います。ただ日本の人口が減るということは、人口の分布が非常に分散することになります。過疎が生まれたり、過密が生まれたり、その差が大きく広がって来るという点で、環境の問題が非常に難しくなって来ると思います。それは1つの危機だろうと思います。

先ほどモンゴルの事例を挙げて、「危機は大事だ」と仰っていた訳ですが、まさにその通りで、「じゃあどうしたらいいか」を考えなければなりません。江守さんは将来の予測の話をして、「現在どうするんだ」と言われると仰っていましたが、私はいつも過去話をしているので、やはり「今はどうなるんだ」と言われます。過去をやるのも未来をやるのも、広い意味では歴史だと思いながら話を伺っておりましたが、「今どうしたらいいか」ということも提案しなければいけないと思うので、3つ提案したいと思います。

1つは、何と言っても節水することです。日本では年間1人当たり700tくらい使っていると思います。これを世界的に見ると、アメリカの1600tに比べれば半分以下ですが、途上国で雨の少ないところと比べると多いということになります。国際比較は難しく、稲作をやっているかやっていないかでも大分違います。しかし、全体的に所得が増えれば水の消費量は増えることははっきりしていますから、世界全体ではこれから増えていきます。そういう時に、「日本は人口が減るから大丈夫だ」と言っているのか。やはりここは、利用面で色々考えなくてははいけません。

それからもう1つは供給の問題ですが、先ほど村上先生から黄河の例が出ましたが、川の水を別の土地に引いてしまったために、下流域に水が流れなくなってしまうということが、様々な場所で発生しています。それからダムについてですが、日本ではダムの開発余地はほとんどありませんし、ダ

ムも寿命があって、土砂が堆積して行って、使い物にならなくなります。それだけではなく、自然の河川を堰き止めてしまったために、土砂が海へ流れなくなって、海岸が痩せてしまい、テトラポットで保護しなければならなくなるという問題が起きています。こうした状況を見ますと、自然の循環を上手く復元して、そこで上手な水の利用法を考えなくてはならないと思います。

最後に、村上先生から「古老に聞きなさい」というお話がありました。国交省のレポートでも「洪水常襲地帯には、家とか工場を建てさせない」、あるいは「危険・リスクは、自分で責任を持って負いなさい」とあるように、そうした知恵を利用する方向へ行くだらうと思っています。つまり堤防で川を堰き止めてしまわずに、経験的に安全なところへ住む。別の言い方をすれば、工学的な水の被害に対して、生態学的な対応を図る。少人口化は、減ることで色々社会の負担が増えることもありますが、一方では空間が多少ゆとりが出来てくることにもなりますので、そこを上手く使って行けば、100年まだありますから、適応できると思っています。

【沖】

それは人口の減少傾向自体もまだまだこれから変わっていく可能性も高いということでしょうか。

【鬼頭】

これはストレスか何かわかりませんが、「人口は減る」ということを前提にして考えた方がいいですね。

【沖】

人口と気候の将来像に関して、「未来というのは、今普通に考えて予測するところなるよ」ということなのですが、それはあくまでも「色々な仮定を置いたらこうなる」という話であって、天気予報みたいに「明日はこうなります」というのとは違うのだと思います。最近天気予報は当たるようになって来ましたので、天気予報で悪い予報が出てしまったら、あんまりできることはありませんね。それに比べると、人口や気候に関する長期の話は、何か悪い将来展望が出て来た場合には、そうならないように、あるいはそうなっても困らないようにしようとする対策を社会が考え、実行に移すようにするのがそうした将来研究の意義だろうと思います。

私は「千年持続学」という話をしています。何で1000年かと言うと、1000年は全然予測がつかないので、100年後を考えるよりも、もっと楽なのです。1000年後については「どうだろう」という話ではなく、「どうであって欲しいか」しか残らない訳です。まさにその「どうであって欲しいか」を考える上で、村上先生が最後に仰ったように、「じゃあ今何が出来るか」ということになると思います。

「千年持続学」で考えてみると、我々の今の暮らしとか社会とか技術とかは、実は意外と過去延々と積み重なって来たものに様々な面で支えられていることに気づきます。皆さん「いや、そんなことはない」「大体5年以内に作られたものばかりじゃないか」と思うかもしれませんが、例えば服を着ること、言葉、色々な仕草の習慣、あるいは電気だって、過去数十年、あるいは数百年の文化の上に成り立っている訳です。そういう過去の色々な恩恵の上に今の我々の非常に豊かな暮らしがあると考えるならば、我々が今築いている社会の様々な側面が100年後の人達の幸せな暮らしに貢献している

はずですし、そうでなければならぬと、僕は思います。そうした時、「どんなふうにあって欲しいか」を設定して、その上で村上先生が仰った「今、何をすべきか」を考えるんだと、私は思っています。

水に関して申しますと、日本の国内外では意識に大きな格差があります。つまり国内では、毎日渇水洪水が気になって夜も眠れないという方は殆どいなくなって来ていると思います。一方、そんな心配が日常茶飯事で、雨季になれば洪水が、乾期になれば水をどう確保するかが常に問題だったり、あるいは毎日水を汲みに長時間通っている人がいたりする国や地域もあります。こうした大きな格差があって、その両者を結ぶシンパシーといいますか、「関心を共有する」という言い方を村上さんはされましたが、それが足りないように思います。そこには水問題だけではなく、気候変動の悪影響も強く関わっていると思います。そういった視点から言った時に、100年後の2107年に水文化、あるいは地球環境、あるいは暮らしの環境が、どうであって欲しいとパネリストの皆さんは思うか、お伺いしたいと思います。ご専門を離れて、個人としてこうであって欲しいという思うことを仰っていただいてもいいですし、あるいはご専門からして、「こういうことであれば努力なしには不可能だけれども、実現は可能である」と言ったお話をしてもいいと思います。

また国内の話で、「水へのアクセスは基本的人権だ」と村上さんからお話がありましたが、日本国憲法には基本的人権は、「人類の多年にわたる自由獲得の努力の成果であつて」「国民の不断的努力によつて、これを保持しなければならない」、つまり放って置いても与えられるものではないと書いてあると理解しています。日本に住む我々が現在、水を安定して得られるのも、これまで何もしないでいて享受できている訳ではないと思います。基本的人権だから、誰かがくれるというものではないと思います。

さて、では、100年後にどうであって欲しいと思うのか、ということをお尋ねしたいと思います。

【小長谷】

リスクがなければ倫理を確立できないというだけの世の中には、なってもらいたくないです。「こんな危険なことがあるから、こうしましょう」という社会になったら寂しいと思います。先生が仰る「最悪のシナリオの回避」というのは、必ずしも「地獄を見るぞ」と脅かして、「だからやめておけ」じゃない筈ですよ。「やっぱり人間だったら、こうだよ」と語りたいですよね。良い社会を求めて努力するんですから、それが倫理の確立を目指しているのですから、「脅かされたら、嫌でも守りましょう」というだけなら…それしかないのだったらもういいじゃん、人類が滅亡しても。

【沖】

「もういいじゃん」というのは、あまりにも「適応」が早すぎる気がします(笑)。

今の話で思い出したのですが、少し会場の皆様の見解を知りたいと思います。皆様が20歳の時に、「明日は今日よりも良くなる」「来年は今日よりもいろんな意味で良くなる」と思っていた方はどのくらいいらっしゃるでしょうか。

<会場挙手>

半分くらいですね。それでは、「いや、そうは思っていなかった」「同じくらいだと思っていた」「明日も、今日と同じだ」、あるいは「明日は、今日より悪くなる」と思っていた方は、どのくらいでしょうか。

〈会場挙手〉

同じような質問を昨今の学生に聞くと、「悪くなることはあっても、良くなることはない」と思っている学生が非常に多かったのです。その原因として、僕は危機感を煽りすぎたせいだと思っています。そこで、もう少し将来に夢があった方がいいなと思うので、ちょっと将来の夢や希望を考えて、それに対して流行言葉で言うところの「バックキャスト」で、その将来の夢を実現するために今どうすればいいかを考えればいいのかと思っていますのです。もっとも、景気がよくなったら、「将来は悪くなる」という学生が減って来ましたので、単に景気が悪いので、皆悲観的になっていたのかと思ったりもしますが(笑)。

【小長谷】

所詮、景気で変わるくらいのもんじゃないですか。

【沖】

しかし今の“脅し”の方法で、100年後の人々の行動を変えるのはよくないのではないのでしょうか。そこでもうちょっと身近なレベルで、モンゴルでも日本でも構わないのですが、水について「こういうことが実現していたらいいな」という点は何かないですか。

【小長谷】

省エネの機械がよく売られていますよね。「前より何%良くなりました」って。「機械に言わずに、人間に言えよ」って思います。「昨日の私よりも、今日の私の方がちょっと省エネ」みたいな。

【沖】

そんな小長谷先生に、「何でオール電化は駄目なんですか」という質問が来ています。つまり発電所でCO₂を捕まえて出ないようにするという技術があるので、電気の方がいいのでは、というご質問です。

【小長谷】

倫理的に言うと、自分だけがオール電化で、世界の他の人はオール電化にしなくてもいいということにはならないですよ。自分がそう目指すと、全員の人に同じ権利を与える。そうすると、それはやっぱり無茶苦茶だと思います。

【沖】

ちょっと感情的なご返答で、質問をされた方は納得されていないかもしれませんが、ここで江守さんから手が挙がったので、江守さんお願いします。

【江守】

技術をどう捉えるかということですが、「技術に頼りすぎることによって、ライフスタイルが変わらない

のは、よくない」という話は、よくわかります。わかりやすい例では、車の燃費はどんどん上がっていますが、車から出る二酸化炭素はなかなか減らない。それは皆が車に乗るようになり、さらに大きいな車に乗るようになるということがあります。だから技術によっていかに効率が上がっても、それをキャンセルして有り余るほどたくさんのサービスを求めるようになるため、技術が進歩しても意味がないという考え方があると思います。

一方で、温暖化を止めるために、例えばこれから 50 年で排出量を半分くらいにするためには、ライフスタイルの変化と技術の利用は、やはり両方やっていかないと間に合いません。ここで言う技術というのは、先程小長谷先生が例に出された、淡水化で技術を使うことによって余計にエネルギーを使うといったものは悪い例となります。今考えているのは、技術を使うことによって、エネルギーの使用量は減って効率が上げる。これに関しては、「これに寄り掛かって、安心してたくさんのサービスを使ってしまう」とならないという前提に立ちますが、受けるサービスの量が同じであれば、明らかに少ないエネルギーで少ない二酸化炭素の排出で済む訳です。ですから、そういった技術の普及は絶対に必要で、最大限にやっていかなくてはいけないことだと思います。

【沖】

それでは村上さんはいかがでしょう。できれば将来の夢、問題設定についてお聞きしたく存じます。

【村上】

これも過去の話になって申し訳ないのですが、私は、今の社会では企業がいつも悪者になるので、企業が非常に努力をした実例を1つご紹介します。皆さんご存知のはずですが。かつて工業団地がたくさん出来て、工業用水が不足すると危機が喧伝され、だからダムを作るという話になりました。ダム建設の基本は、生活用水よりも、工業用水のためにも作らなければいけないと言われていました。

しかし現在、どうしてダムの必要性が減ったかという理由の一つは、やはり企業が非常に努力をして、工業用水を循環型にして、何度も使えるようなシステムと装置を工夫して作って、実行してくれたおかげだと認識しております。日本国内で工業用水をどうするかという危機に対して、技術がかなり大きな発展というか、助け手になったという実例を、私どもは持っていると思います。その意味で、私ども、特に企業は、今のマーケット・メカニズムの資本制社会においては、なかなかモラルだけでは動きません。

これはまったく別の話ですが、お腹を壊した人間もいなけりゃ、「不味かった」って言った人間もないんだから、赤福さんにしても、あれでもいいじゃないかと思います。私は不二家が問題になった時に、わざわざスーパーマーケットへ行って、不二家の製品を買って来て、一生懸命食べていました。元々不二家の製品は嫌いだった人間なのですが、敢えてそういうことをやったのは、多少の抵抗を示したかったからです。

私達はそういう資本制の社会の中に生きていて、何かをやろうとする時に、何かどこかで残念ながら例えばコスト・ベネフィットがきちんと出て来るものです。そういったもので人間が動かざるを得ない領域が、今の社会にはあるということも、残念ながら認めなければならない。そこで、「じゃあ何が出

来るか」と言った時に、私たちはそれなりのことをやっていく義務はあるだろう、というくらいのところにしておいて頂けるとありがたいです。

【沖】

僭越ながら私が補足いたしますと、日本の工業用水は全業種を合わせてほぼ8割という再生利用率です。私が最近見た統計ですと中国は7割弱でした。「7割と8割じゃ、1割しか変わらないじゃないか」と思われる方がいらっしゃるかもしれませんが、8割が循環して使っている水で、新たに取りのが2割ということです。それに対して中国は3割取る訳ですから、同じだけの製品を作るのにぎっくり考えて1.5倍の必要だとなります。これは非常に大きな差になります。

また別の質問が届いています。

「限られた水資源、特にアジア各国では色々な水問題があつて、日本の水に関する技術は非常に高度ですが、それがどんな国のどんな問題に役に立つ可能性を秘めているのでしょうか」

これに対する答えの1つが、今ご紹介いただきました、再生利用の技術だと思います。それからエネルギー的にはあまり良くないという江守さんからお話がありましたが、膜の技術です。膜の分野では日本の企業が世界のトップメーカーに名を連ねています。それから節水の技術です。日本ではインセンティブが働かないという側面もあろうと思いますが、農業に関しても、やはりそれなりのノウハウはあります。あるいは、水のモニタリング。どこにどのくらいの水があつて、それを把握して適宜適切に分配していくという技術です。この技術は各国にあります。日本も海外に出て行けると思っています。逆に日本には資金調達や制度構築も含めて上水道、下水道のシステムを作って運営するといったソフト技術が足りないと、一般に言われているかと存じます。

【鬼頭】

「100年後の短い夢」ですが、人口の話に戻しますと、人口の波動はエネルギー転換と関係があります。先程は文明システムと言いましたが、基本はエネルギーです。つまり狩猟採集から農業を営むようになり、人間がエネルギーを生産できるようになった。薪や炭は勿論ですけれども、家畜、それから食料生産により人口が大きく増える。それから産業革命では化石燃料を利用する技術され、今のエタノールと反対で、畑を人間の食料などに適用できるようになったために、また人口が増えました。

それでは今度来るエネルギー転換は何か。仮にバイオエタノールのようなものになるならば、人口は抑制されなくてははいけません。これは現在の人口減少と合っているかもしれないと思います。ただし熱帯雨林を利益のためにどんどん切ってしまうと、これはまた別な問題が起きてきます。それから太陽エネルギーも、来るエネルギー転換のひとつだと思います。そうなった場合に描かれる社会は、やはりかなり分散的な社会なるのではないのでしょうか。人が1箇所には集まらないで、身近なところで小さな水力発電ができたり、太陽エネルギーを利用できたりする。そういう何かの期待を持って、この10年くらいの間は皆が色々な絵を描いてみることで大切だと思います。そうすれば、100年後、何か実現できる。

それから、先ほど私の発表で紹介しました“ハマッ子どうし”ですが、その名前は、横浜市の水源と

なっている相模川支流の道志川からとっているのです。これは何のためにやっているかという、「この水は、どこから来ていますか」「水源のことも考えましょう」という一種の環境リテラシーです。だから自分は水を生産することは出来ないにしても、どこからどうやって水が来ているかの理解を深めることで、よりよい利用が出来るのではないかという期待が、ここに込められています。

人口減少との関係で言うと、今一番問題なのは、森林の管理が出来なくなっていることです。そうすると、200~300年経てば元の森に戻るにしても、これから100年の間は、山がどんどん荒れる可能性がある。そうすると、いい水も確保できません。だから神奈川県では「県民の森」を持っていて、色々な企業とか、私もその団体に属していますが、時々下草刈りに行ったり、山の早魃材切りに行ったりしています。こういう結びつきを自分で出来なくても、想像できるような立場で動かないと、いい環境って維持できない、というのが私の感想です。

【沖】

今鬼頭さんからお話がありましたエネルギーの話、あるいは食料の話。最近バイオ燃料のように、食料にもなる作物が燃料用に使われる。あるいは逆に食料を作るために多くのエネルギーが使われているといった話が盛んです。この話に水も加えると、エネルギーがあれば淡水化で水が作れる。水力発電でそれなりに電気を作れる訳ですし、逆に食料生産にも水がたくさん必要だけれども、バーチャル・ウォーターというかたちで、水がないところでも食料を作る分の水は、他の地域から運んでくることが出来ます。このように水、食料、エネルギーの3つを一体として考えるべきだろうと最近強く思う訳ですが、そういうエネルギー関連に関しまして、江守さんに3つの質問が来ております。

「今、資源を巡り国際的な話題となっているピークオイルとの関連などをどのようにお考えでしょうか。」

「薪ストーブは、植物から取り込んだ Co2 を薪というかたちで燃やしているので、CO₂を増やしていないと家族には説明していますが、これは正しいのでしょうか。また、石油ストーブを使った場合は、石油を燃やした Co2 を増加させていると考えていいのでしょうか。」

「(京都議定書の) CO₂ 排出量削減目標がありますが、ぶっちゃけた話、達成できると思っていらっしゃるのか。」

“ぶっちゃけ”というのはいいい言葉で、無礼講と同じですね。「本音を言え」ということでしょう。それでは江守さん、お願いします。

【江守】

どれもそんなに詳しくないので、聞きかじりと個人的な意見になるかと思いますが、ピークオイルに関しては、今、原油価格が物凄く高くなっているの、気にしていらっしゃる方も多いと思います。ピークオイルとは、石油はそのうちなくなると言われていますが、その減りつつあるところがもう来ているんじゃないかという話です。一般論だけしか言いませんが、基本的に温暖化とピークオイルをはじめとする資源問題、さらに他の様々な問題を同時に解決するような道、そういう社会像を模索しなくてはならないというのが基本だと思います。幸いにしてピークオイルと温暖化に関しては、石油消費量を減らすことで同時に解決する問題なので非常に都合がいいと思っております。

それから薪のお話ですけれども、いわゆるカーボン・ニュートラルといいますが、植物が光合成で得た炭素を燃やすのために、植物が吸った分のCO₂を吐いているだけなので大丈夫という考え方で。それ自体は間違っていないと思いますが、もしその薪を燃やさずにどっかに朽ちさせることもなく、保管しておくことが仮にできるならば、その方が大気中にはCO₂は出ないので、それに比べるとCO₂を出しているということになるかと思います。

それから京都議定書ですけれども、役所を代表して言うわけではありませんが、達成できると思います。達成するとは、(1990年の基準よりも)8%増えているところから、6%減らすところまで行かなくてはならないのですが、それを全部「国民の努力でやれ」と言っているのではなく、森林が吸収していることで減らしたことにしている分とか、外国で減らしたことにしている分、それから外国で減らしたものをお金を出して買って来ていい分などがあります。日本はそれを合わせて、何が何でも達成すると思っています。それは国際戦略上、そうせざるを得ないと思っています。

国民が努力すればするほど、外から買って来る分が減らせます。国民がさぼっていて、外から買って来る分が増えれば増えるほど、それは要するに財政を圧迫したり、まわりまわって税金が増えたりする訳ですから、そういう意味でもできるだけ頑張った方がいいと思います。

【沖】

最後は私に、「バーチャル・ウォーターについて女性誌などでも論じていらっしゃるが、先生ご自身は地産地消を心掛けていらっしゃるのでしょうか」という、大変厳しい質問がきています。

「ぶっちゃけた話」をしますと、江守さんが「私はモデル屋です。だから、『どうすればいいか』と聞かれたら困ります」と仰ったのと同じで、私は「バーチャル・ウォーターはこうなっています」というのが非常に面白いので研究する訳ですが、「だから、どうしろ」というのは、また別の問題です……というのは、逃げ口上ですが…。

真面目に答えますと、選べる時には、近いか遠いかはあまり見ずに、おいしそうなものを買います。あるいは安全そうなものを買います。先程からものすごく喉が渇いているんですが、このペットボトルの水を皆さんの前で飲むと、ちょっとまずいかなと思って手を出さないでいます。それくらいの小心者です。

地産地消はバーチャル・ウォーターの視点から見ると、1つあやふやな点があります。例えば、「これは地元の牛だからいいだろう」と思って食べると、えさが遠い外国から来ていることがあります。これはバーチャル・ウォーターや自給率で考えると、外国のものになってしまいます。あるいは先程の薪の話も、切った薪を山奥からわざわざ運ぶのには、ガソリンをたくさん使います。このように本当に地産地消をやるのは、かなり精を出さなくてはならないと思います。

今の私の生活では、それは到底出来ていません。国内産であっても、北海道から来たものを食べています。あるいは、たくさんの石油を使って作られた肥料を使って作られた野菜を食べていたり、石油をたくさん使って作られたハウスの野菜を食べていたりするので、いくら近いところから来ている、必ずしも温暖化に関していいかどうかはわかりません。とはいえ、地産地消がいけないと言っているわけではなく、「何とかにいいから」「健康のため」とか理屈ではなく、「地産地消はいいな」と考えること自体に価値を見出すべきだろうと思います。

それでは質問を続けていきたいと思います。

「水の供給は公共的なものであるというものの、“公共的”とは何を指しているのか。官であるのか、政府であるのか、それとも官と民でつくる別の組織なのか」というご質問が、村上先生にきています。

【村上】

公共性という言葉が最近よく使われるようになりましたが、必ずしも政府が全て責任を負うということでもなくともいいと思います。“夜警国家”という言葉がありますが、夜警国家でさえも国家が国民に対して責任を持つ義務があるという理念のもとで、どうかたちで公共性を実現するかに関しては、色々なかたちがありうると思います。少なくとも資本制の中で企業に全面的に委ねることは、公共性に関してはそれを損傷するものだと考えています。

【沖】

ありがとうございました。続きまして小長谷先生へ、「開発しないで 100 年を通す方法はあるのでしょうか」という質問がきています。また「温暖化、少人口、水問題など複雑な難関が、お話を伺って少しずつ理解できました。いずれの話も利益を追求する市場経済と、近代化のマイナスの側面が強く働いているように思われます。これを乗り越える社会の原理というのは可能なのでしょうか」という、質問と同時に「本当に出来るのか」といったご趣旨だと思いますが、そういうご意見です。この2つ、いかがでしょうか。

【小長谷】

開発の全てを否定している訳ではありませんし、NPO も全部が利益を一切求めないということの意味している訳ではありません。例えば、企業が技術を高めて環境にいいものに変えてきた歴史は、利益を考えてそう努力されて来たことでもあると思います。だから利益を全面否定するものではありません。あくまでも開発によって出て来る負の側面を認識する必要があるということと、その解決策としてさらにそれを開発的にやろうとする、その“開発の連鎖”という問題点があるので、気をつけてほしいと思っています。その補足的な論理として、利益を考えない遣り方というのが意味を持つと思っています。

例えばオール電化の問題は、結果的に今まで使ってもいなかった電気の使い方を増やす方向へ導きます。今、日本でトイレを暖めている電源だけで、原発1機分だそうです。また24時間お茶を飲んでいる訳でもないのに、いつもお湯を温めているポットの電源も、計算すると、原発2機分になるそうです。ですから、私たちの暮らしはどんどん余計なエネルギーを使いすぎるようになっていきます。そういう意味で、自分自身が倫理的に省エネ型になって行く。達成したらそういう人には税金免除とか、そういう社会があってもいいかしら。

【沖】

なるほど。ありがとうございます。

もう1件、「水不足が引き起こす塩害、例えばアラル海やガンダガルの遺跡についてどうお考えです

か。またその調査は行われているのか」という質問が来ています。

【小長谷】

私が行っているところは乾燥地域なので、その農業に水を利用する時にかなり塩害が出ているのがあります。

【沖】

私が見たところでも、結局主な要因は過灌漑で、大量の灌漑水が深い地下の岩塩の層まで到達することにより生じています。そこから毛管張力で、水が上がって来る時に、塩を持って来る訳です。それが蒸発する時に、塩を残して真っ白くなります。本当に水がないところではそうはならなくて、乾燥地でかつ下に岩塩があるようなところに、大量にジャブジャブ水をやってしまうと塩害が発生してしまいます。

【小長谷】

それで上がって来てしまった塩を綺麗にしようと思ったら、やっぱり水で流すしかないんですね。

【沖】

そうです。エジプトに行きました時に、シナイ半島に連れて行かれました。そこは砂漠なので、当然砂に塩がたくさん溜まっているんですが、かなり塩分濃度が上がった灌漑の落ち水を、その土壌よりはまだ塩分濃度が低いということで掛けて洗い流して、そこをいずれは耕作地にするといったことをやっている様子を見ました。どのくらい灌漑すると塩も上がって来ないし、作物は適正に育つかというのを適切に判別しながらやるのが農業技術で、そういう意味では食料増産の鍵は灌漑技術だと思います。

【村上】

沖先生に伺いたいのですが、水田は、基本的には、今のような塩害作用に対しては効果的な訳ですよ。

【沖】

そうですね。水田ではそういうことは起こらないことになっています。水田の底には難透水層として粘土をわざわざ入れますので、下から上がってくるのが少ないのだと思います。

【村上】

ポンピングを排除しているんですね。ありがとうございました。

【沖】

私が地球環境問題を真面目に考えていた 20 年くらい前、学生だった頃、「死んだ方がましか」と

真剣に悩んでいました。実は「千年持続学」を私が言い初めの頃に、江守さんは「いや、そんなのはよくない。地球環境が大事だとすると、きっと人類はいなくなった方がいいんだから、今すぐにとは言わないけれども、徐々に人類がいなくなる、千年廃絶学をやるべきだ」と仰っていたと記憶しています。そう言われて、思わず納得してしまった瞬間もあるのですが、それは“手段の目的化”が起こっているのではないかと、最近思うようになりました。“手段の目的化”というのは、例えば学者で言いますと、本当はいい研究をするために予算を取っているにも関わらず、予算を取るのが目的になっているようなことです。あるいは、本当は何かを実現するために温暖化を止める。あるいは何かを実現するために持続的な社会を作ろうとしていたはずなのに、いつの間にかそれらの手段が目的化しているのではないのでしょうか。また、鬼頭さんのお話にもあった国土形成計画のように、「世界に発展するシームレス・アジアの形成」「持続可能な地域の形成」「災害に強いしなやかな国土の形成」「美しい国土の管理と継承」「新たな機軸とする地域づくり」といった目標を達成すれば、それで目的が達成されて万々歳、という訳じゃないですよ。それらの手段を実現することで、何かを実現したかったはずです。僕は、そういう議論を忘れるべきじゃないと思っていて、恐らく究極の目標は幸せ、別な言葉で言うと、健康で文化的な生活が送れることだと思います。そういうのを実現するために持続的であって欲しいし、温暖化も止めよう、あるいは国土形成計画の立案をする訳です。ところが、本当は100年後も幸せであって欲しいと思うからこそ、今色々なことを考えているはずだったのに、考える手段がいつの間にか目的化しているところがあるように思います。それを忘れないようにしないと、「人間は減った方がいいんだから、CO₂をたくさん出している国に、戦争をしかけて人間を減らせばいいや」なんてことにもなりかねない訳で、やはり根源をきちんとおさえておかなければならないと思っています。

前号の「水の文化」で私がインタビューを受けた時に少し申し上げたのが、例えばここは表参道ですが、もう少し先の原宿へ行きますと、渋谷川の昔の流路が流れています。あの河道はあれでいいの。あるいは渋谷のちょっと南へ行くと、下水と切り替わっているような水路がありますけれども、あれでいいの。「都会の川は、そういうものだ」と思ってしまったらそれまでですが、100年あれば、それらをもっと歩いて楽しい、あるいはデートに誘っても楽しいような川に出来ないかなど、色々考えてもいいはず。この辺も含めて、100年後に向けて、今日会場にお越しいただいている方々は、これからの社会が良くなるか悪くなるか、どちらにせよ、今の我々がどういうことをすべきなのか、といったことをお聞きになりたいと思うので、その点についてお話いただきたいと思っています。

【江守】

繰り返しますけれども、僕は温暖化さえ止まれば他がどうなってもいいとは思っておりませんので、100年後には他の様々な問題が同時に解決されなくてはいけないと思っています。温暖化に関して言うと、確実に100年後、人類は二酸化炭素を今に比べると殆ど出さない文明に向かわなくてはいいけない。それは達成可能なことだと思いますので、それに向かってチャレンジをしていくことが大事だと思います。

「ひとり一人が出来ることは何ですか」といつも聞かれますが、先程の鬼頭先生のお話にもありましたが、まずはエネルギーの無駄遣いをしないことです。それから効率のいい技術は積極的に使う。

同じだけのサービスを受けるならば、少ないエネルギーで済みます。もう1つは、環境に配慮していそうな企業の商品を買って、その企業を応援する。あるいは、環境に配慮した制度を作ってくれそうなリーダーを選挙で応援する。そういうことによってもっと広いところにも働きかけることが出来ます。そして最後に言っているのが、「本当に幸せなことは何か」を考えることです。我々はエネルギーをたくさん使うのが幸せだと思って生きている訳ではないし、逆にCO2を削減することが幸せだと思って生きている訳でもありません。「自分は何をしたら満足なのか」を、ひとり1人が見つけて、それをするため必要最低限のエネルギーを使うようになれば、今みたいに皆がたくさん使っているし、使うのが当たり前だからエネルギーをたくさん使うようにはならないだろうという4つを、最近はお話しています。

千年廃絶学の話ですが、僕は人間中心主義者ですので、そんなことは決して言いません。僕が言ったことがうまく伝わらなかったか、沖さんのお考えの中で少しずつ変質してしまったのかもしれませんが、僕が言ったのは、“人類のターミナルケア”ということです。これは千年廃絶学と似ているようで、実は違います。これは僕にとっては御伽話です。「人類は存続しなくちゃいけない」という暗黙の前提を我々は置いています、その理由を素朴に考えたことがあります。種としての本能はあると思いますが、人間はそれよりも、もっと自我と呼ばれるようなもので生きていると思います。そうすると、やはり持続をさせていく責任感もあるかもしれません。

しかし別の考え方として、「資源が有限だったら、それを皆で一番ハッピーに使い切って、人類という今回の文明を終わらせる。皆でそう約束して、そこから子孫を作らないで、資源を全部使い切って、全部あるいは汚くして、ああ良かったねと言って終わる」という御伽話はあるかないかと、沖先生と酔っ払いながら話していました。でもそれを考える時には、もうちょっと真面目なことも考えていました、村上先生が最後に仰った“世代間倫理”なんです。世代間倫理というのは、もっともだと思えますし、そうしなくてはならないと思うのですが、どこまでリアルにそれを考えられるのかという気がしています。例えば「なぜ人を殺してはいけないか」という問いに対するひとつの答えとして、「人を殺していい社会であると、自分も殺されてしまうから」だというものがあります。そういう考え方に立つと、子どもや孫は自分を殺しに来ないだろうし、まだ生まれて来ない人達も確実に自分に対して脅威を与えない訳です。そうすると、倫理はどのように担保されるのか。脅威によっては担保されない訳です。そうすると世代間倫理は口当たりがいいから、口では言っているけど、総論賛成的な、「何か皆やろうね」と言って、「実はやらなくて済む」みたいなところに陥ってしまう気がしました。

【沖】

ありがとうございました。次に鬼頭さんお願いします。

【鬼頭】

私が学生だった1970年台半ばに、「ソイレント・グリーン」という映画がありました。未来のニューヨークが舞台になっていて、多くの人が電気もない、水も自由に手に入らない状態の中、高級マンションに入った人だけそういうものも手に入る、非常に貧富の格差の激しい社会が実現することが描かれていたのですが、それから30年経って我々は幸いそこまで行かなかった。オイルピークの問題が先程出ましたけれども、ピークを過ぎたという人もいるけれども、まだ悲惨じゃない。しかしいずれは

無くなってしまうので、使い切ってしまうと、楽しく消えていくのはひとつの手かもしれません。けれども、本能的に種の保存という行動もする訳ですので、将来を見なくてはいけないとも思います。

環境倫理などの話をすると堅苦しくなってしまうのですが、やはり楽しく長く人類社会を保存する方法を考え、それを受け渡して行くことを考えたい。それはむしろ、苦しみではなく楽しみだと思えます。ですからエネルギーの転換によって迎える社会の青写真を描いていきたいと思えます。例えば大勢の人が歩く新宿などの道路の床に、ばね式の発電機を作るなど、意識しないで自分もエネルギー生産に携われるとか、あるいは楽しんで何かが出来る装置がもっと出てきたら、結構面白いと思えます。そのご褒美として、働いた分だけテレビを見ていただけるとか、工夫はあると思っております。だから、あまり深刻にならずに遊び半分色々試してみる事の中から、何かが出て来ると期待しております。

【沖】

ありがとうございます。小長谷さんお願いします。

【小長谷】

具体的な処方箋については、江守先生がたくさん言ってくださったので、「その教えを守ること」という一言でいいと思えます。それで、「楽しく」という点で言うと、私は2つのことを皆さんに提案したいと思えます。1つは、環境問題に関しては良いと言われていることにも結構嘘が多いので、しっかり読んで調べる事。知ること自体は楽しいことだと思えます。もう1つは、私自身が環境問題の専門家でもないのに、こう引っ張り出されるのは、真逆と思われているモンゴルに出入りしているからですね。あそこで身につけている生活倫理観は、ここ日本で暮らす時に非常に大きな差異を与える訳です。それで困ったこともあります。例えば向こうでは少しの水でしか顔を洗わないので、つつい日本でも顔を洗うのを忘れて仕事に行ってしまったような失敗もありますけれども、自然に「省エネとは何か」というのが見られる場でもあります。ですから2番目のお勧めは、「モンゴルに行ってみたらどうですか」ということです。それも楽しいでしょう。たとえばね。そんなふうにして、ひとり一人が「省エネって何かしら」ということを考えて暮らすことが、世代間倫理の形成になると思えます。

【沖】

ありがとうございます。最後に村上さん、お願いします。

【村上】

私が申し上げたいポイントは悲観シナリオになってしまうんですが、「文明は必ず滅びる」ということを確信しています。ただし文化は滅びない。だから私たちの近代科学文明も、やがて必ず滅びる。それは論理的にも私は証明できると思っておりますが、経験的にも過去の文明が全て滅んでいく訳です。しかし文化としては残っているところがたくさんある。その意味で我々の文明は必ず滅びるということ。私が生きている間には多分滅びないだろうと安心していますが、しかし滅びるだろうと思っております。それが先程江守さんがおっしゃった「人類の最後の晩餐」になるのか分かりませんが、文化は

生き残ると思っていますので、色々なかたちで、文化として再生していく。そこへどうやって軟着陸させるかを考えていくことが、人間の課題だと思っています。

そういう意味で言いますと、世代間倫理というのは、一方から言えばこれは大事なことだと思います。これは水の問題を考える場合でも、100年先の話を考える前に、今の問題で考えなければいけないことがたくさんある訳ですね。水問題、病気との戦い、貧困との戦い、さらには生活環境との戦いもあります。今本当に苦しんでいる人達に対して、どうして私達は手を差し伸べないのか。100年先の子孫に対して責任を感じるならば、例えば地球の3分の2の地域に住む80%の貧困な人達を、地球の資源の86%を消費している富裕な人間たちが、そのまま放って置いていいのか。その責任は、100年先の世代に対する責任ももっと強くあるはずですので、そういう問題に対して、私達は手を拱いている訳にはいきません。勿論それに一生懸命働いている人達はたくさんいますし、私も自分なりに自分の出来ることはやっているつもりではありますが、とても満足できる状態ではありません。そういうことを考えた時に、世代間倫理の論理に逃げ込んで、今の問題に目を瞑る訳にはいかないと申し上げておきたいです。

ただし「殺す無かれ」ということに対しては適用できないかもしれませんが、私は倫理というものは、人間が時間が経つにつれて、ある程度拡張して来たという実績があると思っています。これは『The Right of Nature』という本を書いたロデリック・ナッシュというアメリカの環境学者が言っていることで、私達は倫理というと、隣で一緒に生きているコミュニティのメンバーに対して、まずは倫理的な考慮をするところから始まって、あるいは家族の中でというところから始まって、少しずつ外延が広がって行った。極端なことを言うと、もしかしたらグリーン・ピースのような人達のように、人間を超えて、さらに色々な生物にまで倫理的な責任を負わなければならないと感じます。例えば、アメリカで実際にあった例ですけれども、ディズニーが、非常に広いアメリカのある地域を、ディズニーランド的なアミューズメント施設に開発しようとしたことがありました。その開発によって、被害を受ける人は誰もいなかったというのですが、ある弁護士が、そこで切られる木の代弁者として法廷へ提訴したという例があります。そこで「一本の木が、裁判における当事者適格を持っているか」という問いが立てられました。裁判所の判断は、最終的にはないという判断で落ち着いたのですが、少数意見ではあると判断をした判事もいたという事実があります。これは幾ら何でも行き過ぎですが、私達は今生きている人間、あるいは自分が知っている人間だけに倫理的な配慮をすることで満足していただけるかどうか。先程距離の話はありましたが、責任は心理的・地理的距離に逆比例して、段々と薄れている感じがします。同時に時間的にも遠い人間に対しての倫理的感覚は薄れていく。距離が多くなれば、そういう倫理的配慮が次第に薄れていきます。

心理的な距離に関しては、次のような例があります。私が大変尊敬しております、天下の碩学といわれる方が、私の目の前で、「村上さん、私は家族の健康のためにうちでは煙草を吸わないんですよ」と仰る訳ですが、その方の指先には、紫煙のたなびく煙草がある訳です。私はそういう倫理的配慮の外にある、笑われますけれども、それは当然なんです。心理的に言えば、「自分の家族は大事だけれども、たまたま会う村上とそんな感覚を持つのは無意味だ」というのは、ごく自然な感覚だと思います。そういう感覚に対して、倫理は少しずつ抵抗して来た。つまり、少しずつ倫理の及ぶ範囲を広げてきた実績はあると思いますし、それは悪いことではないと思っています。

【沖】

どうもありがとうございます。

皆様と一緒に、パネルディスカッションをやらせて頂きました。世代間倫理に関しましてお話をしますと、秋入学の留学生を対象にしたガイダンス的な授業がありまして、そこで「いかにして真面目に大学院の授業を受けるか」「きちんと勉強しろ」ということを話すのですが、その折に、「名誉と自由と財産。この3つのうち、2つまでは得られるけれども、3つ全ては得られないとしたらどの2つを選ぶか」と、数人のグループに分けて議論させました。そうすると、「名誉は要らない。財産と自由だけをくれ」と、どのグループも言って、ただ1人だけ「お金は要らないから、名誉と自由が欲しい」と言ったのがいました。しかし「墓場に持って行けるものはどれか」と聞くと、一様に困った顔をします。そこで困ってしまうところに、世代間倫理のモチベーションがあると思います。その名誉というのも、別に世の中で有名というのではなく、まさに今村上さんがおっしゃった家族あるいは親戚、友達からどう思われるかということの名誉であって、その辺に支えられているのではないのでしょうか。

なかなか水の話になりませんでした。100年後にどういう社会であって欲しいか、また、それを支える要素として水だけが良ければいいという話ではなく、水と食料とエネルギーがあって、何か望むべき社会を実現するための手段のひとつとしての良い水環境があって欲しいということに思いを巡らせ、それに対して何が出来るかということを考える必要があるのだと思います。

それではここで、パネルディスカッションを終わりたいと思います。どうもありがとうございました。